フェドシューク
古典作家の難解なところ
あるいは
19世紀ロシアの生活百科(その2)

Ю. А. Федосюк
Что непонятно у классиков
или
Энциклопедия русского быта XIX века

鈴木淳一
佐藤剛史
阿部昌子
神田良平
周東真幸

これは「文化と言語」56号(2002年3月29日)に発表したフェドシューク著『古典作家の難解なところ、あるいは19世紀ロシアの生活百科』翻訳の続きである[1]。前回取り上げたのは第9章だったが、今回は第1章を訳出することにした。今回の翻訳作業も前回同様、鈴木の授業に集った大学院生が主体となっておこない、鈴木がそれに朱を入れるというスタイルで進められた。翻訳分担は1～2節が阿部、3節が神田、佐藤、周東の均等割りとなっている。

また注についても前回同様で、訳注は[　]という形でできる限り本文中に組み入れるようにしたが、より詳細な説明が必要と判断した場合は脚注をつけた。訳語だけで分かり難い場合はロシア語を示すようにしたのも前回同様である。

[1] 前回は著者のФедосюкを「フェドーシュク」としたのは間違いである。このウクライナ姓のアクセントは最後の母音「ю」にあるので正しくは「フェドシューク」である。訂正してお詫びします。

第1章
民間暦
Народный календарь

1節
教会暦
Церковный календарь

我々は一昼夜以上一年以内の時間を月や日によって測定する。我国の祖先たちはつい最近まで現在とは異なった算定法を持っており、その算定法は教会の祭日と斎に基いたものであった。ごく普通の読み書きできない農民にとってはもちろん、日付や月には疎かった都市住民にとってもまた、事件は「キリスト迎接祭に на Сретенье」、あるいは「聖ゲオルギー祭に на Егория」、あるいは「聖使徒ピョートル祭[聖使徒ペテロ祭]前の斎に в Петровки」、あるいは「カザンの生神女[聖母]イコン祭に на Казанскую」発生するものであった。つまり彼らにとって事件とは教会暦の記念日にしたがって生起するものだったわけだが、教会暦はキリスト教以前からの古い迷信や俗信とも密接に結びついているゆえ、それはまた民間暦 народный календарь と呼ぶことも許されるだろう。

あれこれの日付の民間的な呼称は古典文学作品の中に広く使われているが、そうした呼称は現代の読者を複雑な状況に追い込んでしまう。我々現代の読者には、当該の事件がいつ起こっているのかがよく分からないからである。ネクラーソフ Н. А. Некрасов[1821-77]の物語詩『誰にルーシは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』の一節がそのいい例である。そこでは平凡な農婦マトリョーナ・チモフェーエヴナ Матрена Тимофеевна が7人の放浪する百姓たちに自らの生活について語ってきかせるが、それは子供時代や結婚生活の、それに母親としての明るい思い出にほとんど彩られることのない苦労だらけの生活である。彼女の夫はペテルブルグで暖炉工として働いている。

冬にフィリプゥシカが来た。
絹のショールを持ってきてくれて
聖エカテリーナの日には
橇に乗せて遊んでくれた。
[第2部「農婦 Крестьянка」2章「歌謡 Песни」]
Зимой пришел Филиппушка,
Привез платочек щелковый
Да прокатил на саночках
В Екатеринин день.

夫婦は村で一緒に冬を過ごすが、それから

フィリップは生神女[聖母]福音祭に村を去り、
カザンの生神女[聖母]イコン祭の日に
私は息子を産みおとした。
[同上]
Филипп на Благовещенье
Ушел, а на Казанскую
Я сына родила.

ここで言及されている祝日は我々読者に、季節が冬であること以外、何も教えてはくれない。だがネクラーソフの同時代人である聞き手の百姓たちにとっては、同時代の読者にとってと同様、すべてが掌を指すように明らかであった。種を明かせば、〈**聖エカテリーナの日 день святой Екатерины**〉とは旧暦の11月24日(新暦の12月7日)に、〈**至聖生神女[聖母]福音祭 Благовещение**〉とは旧暦3月25日(新暦4月7日)に、そして〈**秋のカザンの生神女[聖母]イコン祭 осенний праздник иконы Казанской Богоматери**〉とは旧暦10月22日(新暦11月4日)に祝われる祝日なのである[1]。

誰か一人の聖人の追善が、大抵は数人の聖人の追善が催されなかったり、あるいはキリスト教神話のなんらかの出来事が祝されない日は、年に一日としてなかった。

地方在住の貴族も同じように公式の暦には精通していなかった。ゴンチャローフ И. А. Гончаров[1812-91]は長編『オブローモフ Обломов』で主人公を取りまく状況についてこう書いている——「彼らは時の経過を祝日や季節、様々な家族的な出来事によって計算しており、月や日付をひきあいに出すことなど一度もなかった。こうした事態にいたった原因の一部はおそらく、オブローモフ以外(このオブローモフは幼いイリヤーのこと——原著者)の誰も月の名称や日付の順番をまともに覚えていなかったことにあるのだろう Они вели счет времени по праздникам, по временам года, по разным семейным и домашним случаям, не ссылаясь никогда ни на месяцы, ни на числа. Может быть, это происходило частью из-за того, что кроме самого Обломова, прочие все путали и названия месяцев, и порядок чисел」[1部9章「オブローモフの夢」]。

2節
旧暦と新暦
Старый и Новый Стиль

読者の皆さんはすでにお気づきのことと思うが、ネクラーソフのマトリョーナ・チモフェーエヴナによって語られた祝祭日の近代的日付については新旧のスタイルで、つまり旧暦と新暦の双方によって示されていた。では旧暦と新暦の違いはどこにあるのだろう？

ローマ皇帝ユリウス・カサエルによって紀元後45年に導入されたユリウス

[1] 正教では「聖母マリア」を「生神女マリア」と呼ぶ。本稿では以後「生神女」という呼称を用いることとする。

暦では、1年(つまり地球が太陽の周りを完全に一周する期間)があまり正確に計測されてはおらず、そこには11分14秒の余剰が含まれていた。13世紀に3日間短縮する訂正処置がとられたにもかかわらず、1500年の間にこの差は10日にもおよんだ。そのため1582年にローマ法王グレゴリウス13世は、暦から余分な10日を差し引く勅令を出した。こうしてグレゴリウス暦(新暦)がまずはヨーロッパの大部分の国々に、ついでアメリカに導入されることになったのであった。ところがロシアはカトリック教会の総帥が行った訂正に同意せず、ユリウス暦に拘泥し続けた。新暦がソビエト政権によってロシアに導入されたのは1918年2月のことで、そのとき新旧の暦の差はすでに13日に達していた。このグレゴリウス暦の導入によってロシアの暦法は全ヨーロッパ諸国およびアメリカの暦法と横一線に並び立つことになったのであるが、ロシア正教会はこの改革を認めず、現在にいたるまでユリウス暦に従った生活を続けている。

というわけで新旧の暦の差は20世紀では13日、19世紀では12日、18世紀では11日ということになったわけである。2001年1月からの新旧の暦の差は14日に達することになる[2]。

ロシアの古典文学作品を読むときには、ロシア国家公認のグレゴリウス暦と旧暦であるユリウス暦との差を考慮するに越したことはない。さもなければ我々読者は、我が国の古典作家によって描かれた事件の起きた日時をきちんと正確に理解できなくなってしまうだろう。次にいくつか例を引いてみよう。

今日でもよくあることだが、5月上旬に雷鳴の轟きが聞こえると、「私は5月初めの雷が大好きだ…… Люблю грозу в начале мая...」というチュッチェフ Ф. И. Тютчев[1803-73]の有名な詩作品『春の雷雨 Весенняя гроза』の冒頭

[2] もう少し詳細に説明するとこうなる。すなわち1500年2月20日〜1700年2月18日は旧暦に10日を、1700年2月19日〜1800年2月17日は旧暦に11日を、1800年2月18日〜1900年2月28日は旧暦に12日を、1900年3月1日〜1918年1月31日は旧暦に13日を加えたものが新暦となる。したがってたとえば旧暦1750年5月1日は新暦1750年5月12日、旧暦1850年5月1日は新暦1850年5月13日となる。

が引用される。その際これが19世紀に書かれた詩作品であることに思いをいたす人はめったにいない。19世紀ロシアの5月の始まりは現在の暦の5月13日であり(12日間の差があるため)、その時期のロシア中部では雷雨はめずらしいものでもなんでもないのである。であればこそチュッチェフは5月上旬(現在の5月中旬)に初めて訪れた雷雨を描きながら、少しも驚くことなく、ただただ喜んでいるのである。

トゥルゲーネフ И. С. Тургенев の短編『音がする Стучит!』[『猟人日記』所収]では次のようなフレーズに出会う ——「それは7月中旬のことであった。ひどい暑さが続いていた ...дело было в десятых числах июля и жары стояли страшные...」。今となってはもはや我々読者には、ここで話題になっているのが現在の7月下旬のことだということは明らかである。トゥルゲーネフのもう一つの作品『父と子 Отцы и Дети』では次のように語られている ——「1年で最良の日々、6月上旬がやってきた Наступили лучшие дни в году — первые дни июня」[10章]。読者には、ここに12日を足してみれば、トゥルゲーネフが現在の暦のいつ頃を1年で最良の日々と考えていたかが判明するだろう。

本書ではこの先、新旧の日付については斜線を挟んで前後に旧暦、新暦という順番で提示することにしよう。

3節
祭日と斎期
праздники и посты

キリスト教の主な年中祝祭日は、全部で12にのぼる。教会スラヴ語では12を двунадесять もしくは дванадесять といったため、これらの祝日は〈**12大祭日 двунадесятый (дванадесятый) праздник**〉と呼ばれていた。

十二大祭日の内訳は以下の通りである。「主のエルサレム入城祭 Вход Господень в Иерусалим」もしくは「聖枝祭 Вербное воскресенье[=неделя ваий]」、「主の昇天祭 Вознесение Господне」、「聖神降臨祭 Троица」もしくは

「五旬祭 Пятидесятница」(以上4つは移動祝日)、「主の洗礼祭 Крещение (Господа Бога и Спаса Нашего Иисуса Христа)」あるいは「神現祭 (Святое) Богоявление」、「主の迎接祭 Сретение (Господа Нашего Иисуса Христа)」、「至聖生神女福音祭 Благовещение (Пресвятой Богородицы)」、「主の変容祭 Преображение (Господа Бога и Спаса Нашего Иисуса Христа)」、「至聖生神女就寝祭 Успение (Пресвятой Владычицы Нашей Богородицы и Приснодевы Марии)」、「至聖生神女誕降祭 Рождество (Пресвятой Владычицы Нашей) Богородицы (и Приснодевы Марии)」、「主の十字架挙栄祭 Воздвижение (Честного и Животворящего Креста Господня)」、「至聖生神女進堂祭 Введение во храм (Пресвятой Владычицы Нашей) Богородицы (и Приснодевы Марии)」、「主の降誕祭 Рождество Христово (=Рождество Господа Бога и Спаса Нашего Иисуса Христа)」(以上8つは固定祝日)。正教の主要な祝日である「主の復活大祭 Пасха Христова (=Светлое Христово Воскресенье)」は12大祭日には入らず、独立した祝日となっている[1]。

ネクラーソフの物語詩『誰にロシアは住みよいか Кому на Руси жить хорошо』では、地主オボルト・オボルドゥーエフ Оболт-Оболдуев が、農奴制下での自らの裕福で気ままな暮らしぶりを万感を込めてこう回想している——

崇むべき十二大祭の
どの祝日の前にも、
我が家の飾り立てた部屋部屋では
司祭が徹夜祷をつとめたもの。
[1部5章「地主」]
Пред каждым почитаемым
Двунадесятым праздником

[1] これではいかにも分かり辛いので、章末に掲載した一覧表も参照のこと。

В моих парадных горницах
Поп всенощну служил.

実際自宅にて費用のかさむ長時間にわたる奉神礼(＝礼拝式、祈祷式、ミサ богослужение)を[1]、すなわち夕方から真夜中まで続く〈**徹夜祷 Всенощная**〉をとり行なうなど、どんな地主にも可能なことではさらさらなかった。

ここで暦の順序にしたがって、革命前のロシアで広く祝われ守られていたもので、ロシア古典文学に反映されている基本的な祝日と斎について説明することにしよう。

冬の主要な祝日だったのは、「主の降誕祭」(12月25日／1月7日)翌日から「神現祭」(1月6日／19日)まで続いた〈**クリスマス週間 святки**〉である。この時期はちょっとした農閑期、つまり大部分の農家の懐が比較的潤っているわずかな期間であり、民衆は大衆娯楽にいそしんだ。「クリスマス週間がやってきた！　なんたる楽しさ！　Настали святки! То-то радость!」――プゥシキンは『エヴゲニー・オネーギン Евгений Онегин』にそう書いている[第5章7連]。

クリスマス週間とはかつて異教の古代スラヴ人にあっては、忌まわしいことから身を清める時期、すなわち身辺整理とみそぎの後、神々に供犠を献げて祝宴を催す期間のことであった。

イエス・キリストの生誕を祝う〈**主の降誕祭 Рождество**〉の前日、すなわち〈**糖飯日 сочельник**〉には、若者たちが通りをねり歩き、〈**祝賀歌 колядка**〉と呼ばれる特別な歌を歌い、家々の前で踊っては家主に馳走と小銭をねだった。この習慣はゴーゴリの中編『降誕祭前夜 Ночь перед Рождеством』に鮮やかに書かれている[2]。

---

[1] 「ミサ」「礼拝式」「祈祷式」のことを正教では「奉神礼」と呼ぶ。本稿では以後「奉神礼」という呼称を用いることとする。

[2] 〈糖飯日сочельник〉は年に2回ある。ここで言及されているのは〈降誕祭前糖飯日

クリスマス週間がやってくると、若者たちは多種多様な動物の毛皮を身にまとって仮面を被り、とてつもない怪物や不具者のまねをした。仮装した人々が家々を経巡り歩く様子は、A. H.オストロフスキーの喜劇『貧は罪ならず Бедность не порок』に描かれている。ロストフ家の領地およびメリュコフ家の領地における仮装した人々をまじえてのクリスマス週間の賑々しい雰囲気は、レフ・トルストイの『戦争と平和 Война и мир』(第2部4篇10章)に色彩豊かに描かれている。

〈主の洗礼祭 Крещение〉もしくは**〈神現祭 Богоявление〉**はイエス・キリストの洗礼儀式、すなわちイエスが聖なるヨルダン川の水で洗礼されたことを記念する儀式だとされている。マタイ福音書によると、このときイエスの頭上に神の聖霊が鳩の姿で降り立ってとされる[3章16節]。「神現祭 Богоявление」という呼び名はこのことに由来する。

主の洗礼祭のときには乙女たちだけが男たちと離れて集まり、将来について、まずは何よりも運命の人 суженый、つまりまだ見ぬ未来の夫について占うのが常だった。そこには古代から多くの点で継承されてきた儀式の一部始終が、あれこれの前兆の謎解きを伴った様々な魔術的行為が残存していた――「軽率な若者たちが占いをする Гадает ветреная младость」(プゥシキン)[『エヴゲニー・オネーギン』第5章7連]。それは例えば、道で最初に出会った人に名前を尋ねてみて、将来の花婿はその人と同じ名前でなければならないといった類のものである。「心根がロシア娘 русская душой」のタチヤーナもまた夢中になった素朴で感動的な占いの様子は、『エヴゲニー・オネーギン』第5章に描かれている[4～6連]。

主の洗礼祭時に行なわれる占いの種類については、B. A.ジュコフスキー Жуковский のロマンチックなバラード『スベトラーナ Светлана』にもっと詳しく語られている。このバラードの第一連は広く知られている――「かつて主

Рождественный сочельник〉であり、もうひとつは〈洗礼祭前糖飯日 Крещенский сочельник〉である。

の洗礼祭の夜には／娘たちが占いをしたものだった Раз в крещенский вечерок / Девушки гадали」[第1連1～2行]。

主の洗礼祭は通常厳しい寒さと結びつけられ、民衆はその寒さを「洗礼祭の大寒 крещенские морозы」と呼び慣わしていた。別れて数年後に首都の舞踏会で、今は将軍の妻となったかつての地方地主貴族令嬢を目にしたとき、オネーギンはこう漏らしている――「いやはや！　今の彼女を包んでいるのは／あの激しい洗礼祭の大寒だ！　У! как теперь окружена / Крещенским холодом она!」[8章33連]。

かつて祝われていたのは誕生日ではなく、その人の〈**名の日 именин день**〉であった。名の日とは自分の洗礼名をあやかった聖人の祝日のことである。たとえば韻文小説『エヴゲニー・オネーギン』のクライマックスの一つはヒロインの名の日、すなわち〈**タチヤーナの日 Татьянин день**〉である1月12日／25日に当たっている。そしてその翌朝、オネーギンとレンスキーは宿命的な決闘の場で相見えることになるのである。

早春の最も陽気な祝日は、まる一週間続く〈**謝肉祭**(＝バター祭)**масленица**〉である。

謝肉祭は太古の昔に起源を持っている。異教徒にとって謝肉祭は、冬を送別し、春を出迎える祭であった。謝肉祭を一定の時期に特定することはできない。謝肉祭の日取りは変化する。なぜか？　謝肉祭週間(バター週間)масленная неделя は、正教の重要な祝日である〈**復活大祭 Пасха**〉と不可分だが、復活大祭自体が恒常的な日付を持たないからである。復活大祭は移動祝日であり、その期日は太陽と月双方の位置取りによって決まるのである。復活大祭が祝われるのは春分過ぎ初めての満月の後の最初の日曜日と決まっている。したがって復活大祭の期日は毎年、旧暦3月22日から4月25日まで(新暦では4月5日から5月8日まで)の35日の間をいったりきたりすることになる。

謝肉祭は復活大祭の8週間前に始まる。すなわち新暦2月から3月の間に始まることになる。謝肉祭の1週間は肉を食べることを禁じられるが、それ以外の食物はほしいだけ食べることが許される。謝肉祭の浮かれ騒ぎの直後にはほ

とんど7週間にわたる長く厳しい大斎 Великий пост が待ちうけているからである。諺も、「猫にとっていつでも謝肉祭とは限らない。やがて大斎もやってくる Не все коту масленица, придет и Великий пост」と警告している。オストロフスキーはこの諺の前半部分をその喜劇のひとつの題名にしている。謝肉祭後半の4日間、すなわち木曜日から日曜日までは〈**大謝肉祭 Широкая масленица**〉と呼ばれるが、「大 широкая」とは浮かれ騒ぎが頂点に達するという意味である。

謝肉祭週間の最終日は〈**赦罪の主日**[=日曜日]**прощеное воскресенье**〉、もしくは〈**赦罪の日 прощеный день**〉と呼ばれる。大斎開始前日にあたるこの日には、家族全員がお互いにお辞儀をし、故意にあるいはやむなく与えたあらゆる侮辱や悲しみの許しを乞い合うのである。

「我が家では夜遅く、家族みんながその時突然穏やかになり、お互いに恭しくお辞儀をし合い、許しを乞い合ったのでした У нас в доме, поздним вечером, все вдруг делались тогда кроткими, смиренно кланялись друг другу, прося друг у друга прощенья」――ブゥニン И. А. Бунин は自伝小説『アルセーニエフの生涯 Жизнь Арсеньева』にこう書いている。

赦罪の日曜日には時折まったく異教的な儀式が行われることもあった。それは謝肉祭送別の儀式で、女装させられた藁案山子の姿で謝肉祭を火葬するというものだが、この儀式には歌や踊りが伴なった。こうした儀式については、オストロフスキーの戯曲童話 пьеса-сказка『雪娘 Снегурочка』やリムスキー・コルサコフ Н. А. Римский-Корсаков による同名のオペラの中に窺い見ることができる。

謝肉祭翌日は大斎の始めを告げる〈**聖月曜日 чистый понедельник**〉である。ブゥニンに『聖月曜日 Чистый понедельник』という短編があるが、その短編の主要な事件はこの日に起こるのである。

ここで注意すべきは、教会暦では週の多くがそれぞれの固有の名称をもっているということである。例えば謝肉祭は〈**肉断ち週 мясопустная неделя**(一週間ずっと肉が食卓に上らない)〉、肉断ち週前の一週間は〈**斑週 пестрая**

неделя(斎日と非斎日が交互にやってきて一週間が斑模様となる)〉、そしてさらに斑週前の一週間は〈**斉一週 сплошная неделя**(一週間のどの日も斉一に非斎日)〉と呼ばれる。

オストロフスキーの喜劇『罪と不幸は相手かまわず Грех да беда на кого не живет』のジミグゥリナ Жмигулина は、若い地主のババーエフ Бабаев にこう言っている――「わたし、とてもよく覚えてるわ。あなたが去った斑週からもう三年目になるのね Я очень хорошо помню: с пестрой недели третий год пошел, как вы уехали」。斑週は2月もしくは3月の特筆すべきことがあるような日でもなければ、祝日でもなんでもない。ジミグゥリナの記憶のよさは、彼女の青年に対する決して消え失せることのない慕情を露呈させているのである。

ここで話題を大斎へと移す前に、〈**斎 пост**〉一般について触れておかなければなるまい。

どんな斎も信者に対して厳しい要求を少なからずつきつける。その要求とは間断なき祈り、様々な食物の節制、世俗的娯楽や性的満足の完全な拒否といったもので、一言でいえばそれは生活上の快楽すべてを断つということである。1年間の斎を統計してみると、数週間におよぶ斎が4回と、副次的な祝日とされる一日だけの斎が3回ということになるが[1]、それは毎週の斎日である水曜と金曜を勘定に入れないでの話である。したがって一年間の斎日総数は178から199日にもなる。

復活大祭前の〈**大斎 Великий пост**〉はすべての斎の中で最も重要にして厳

[1] 長期にわたる4つの斎とは、①「大斎 Великий пост」(復活大祭前7週間)、②「聖使徒ピョートル(ペテロ)祭前の斎 Петров пост」(五旬祭～6月29日／7月12日)、③「生神女就寝祭前の斎 Успенский пост」(8月1～15日／14～28日)、④「主の降誕祭前の斎 Рождественский пост(＝フィリップの斎 Филипповский пост)」(11月15日～12月24日／11月28日～1月6日)のこと。また一日だけの斎とは、①「先授イオアン斬首の日(＝洗礼者ヨハネ祭)день Усекновения главы Иоанна Предтечи」(8月29日／9月11日)、②「十字架挙栄祭 Воздвижение Креста Господня」(9月14日／27日)、③「洗礼祭前糖飯日 Крещенский сочельник」(1月5日／18日)に行なわれる斎のこと。

しいものである。大斎をその他の斎から分かつのは、精進が特に厳格な点、つまり肉や乳製品といった〈**精進不可食物 скоромная пища**〉を一切断つという点である。食物の摂取は時としてぎりぎりまで制限される。「家では斎日ともなると煮炊きは一切せず、サモワールすら用意されなかった Дома, по случаю поста, ничего не варили и не ставили самовара」── チェーホフの短編『殺人 Убийство』[第4章]にはこう書かれている。大斎日には劇場やサーカスの公演はもちろん、あらゆる種類の大衆娯楽が一切禁止された。

他の斎の場合同様、大斎時にも結婚式は許されなかった。「今は大斎中ですから、結婚式は行なわれません Теперь Великий пост и венчать не станут」── ドフトエフスキーの長編『虐げられた人々 Униженные и оскорбленные』のアリョーシャはそう言っている[第4部5章]。

復活大祭直前の大斎最終週は、十字架に磔されたイエス・キリストの受難 страсть、すなわち苦悩 страдания を記念して、〈**受難週間 страстная неделя / седмица**〉と呼ばれる。間断なき奉神礼 богослужение ととりわけ厳しい精進がたっぷりと盛り込まれたこの一週間は、そのすべての曜日に「受難の страстной」あるいは「偉大な великий」という形容辞が冠されている。

プゥシキンはリツェイ時代の詩『小都市 Городок』の中でこう歌っている──

私は安息に無縁であった、
ああ！　ほんのわずかの間さえ。
まるで大木曜日に
経机のそばに立つ
ひどく疲れた堂務者さながらに。
Не ведал я покоя,
Увы! ни на часок,
Как будто у налоя.
В великий четверток
Измученный дьячок.

ここに出てくる木曜日はしばしば〈**清浄な чистый**〉という形容辞が冠されることもある[1]。

「こうしたことはすべて受難の金曜日に起こった Всё это происходило в страстную пятницу」――ドフトエフスキーは『虐げられし人々』の中にこう書いているが[同前]、ここで言及されているのは復活大祭前最後の金曜日のことである。

信仰心の篤いアドゥエフ Адуев の母は、ペテルブルクへ勤めにいく息子を見送る途中、息子にこう諭している――「斎はきちんと守るんですよ、ねえお前。これは大事なことなんですからね！　水曜と金曜のことは神様が大目に見てくれるとしても、大斎となったらしっかり精進しなくちゃね。ミハイロ・ミハイルィチを見てご覧。賢い人だと思われているけど、あの人はいったい何なの？　肉食期であろうと受難週間であろうと、あの人はいつだって同じものをがっついてるじゃないの。まったく身の毛がよだってしまうぐらいだわ！ Блюди посты, мой друг: это великое дело! В среду и пятницу――Бог простит, а в Великий пост――Боже оборони. Вот Михайло Михайлыч и умным человеком считаете, а что в нем? Что, мясоед, что страстная неделя――все одно жрет. Даже волос дыбом становится!」[ゴンチャローフ『平凡物語 Обыкновенная история』]。

復活大祭の夜の様子は、早朝の祈祷 заутреня とともに文学作品中に再三再四描かれてきた。その中でももっとも際立った記述はレフ・トルストイの長編『復活 Воскресение』中のもので、そこではこの祝日がネフリュードフのカチューシャに対するめらめらと燃え上がるような強く深い愛情によって彩られている[第1部15章]。

---

[1] Четверг には беликий, чистый, страстной などが冠されるが、いずれも通常は「洗足木曜日」と訳される。

ロシア正教の年間行事で重要な祝日とは、〈**復活大祭 Пасха**〉あるいは〈**光明キリスト復活祭 Светлое Христово Воскресение**〉である。この祝日はキリスト教徒がユダヤ人から借用したもので、そもそもはユダヤ民族のエジプトでの隷属状態からの解放を記念して定められた祝日であった。キリスト教徒はこの祝日にまったく別の意義を盛り込んだ。キリスト教徒はこの祝日において、イエス・キリストが磔に処され、十字架から降ろされた後に奇蹟的に復活したことを祝すのである。

復活大祭という祝日自体が、民間ではしばしば〈**聖週 Святая неделя**〉あるいはたんに〈**聖 Святая**〉と呼ばれていた。ここで使われている「週 неделя」という語は、今では廃れてしまった古い意味合い、つまり「日曜日 воскресный день」として理解する必要がある。「週 неделя」とは、「何もしない не делать」、「働かない не работать」に由来する語だからである。後年この「週 неделя」という語は全7日間を、あるいは教会スラヴ語の「一週間 седмица」を意味するようになり、一方仕事をしない日はキリストの復活を祝して日曜日と呼ばれるようになったのである。

ドストエフスキーДостоевский の長編『罪と罰 Преступление и наказание』のエピローグでは、ラスコーリニコフが「大斎期の終わりから聖週[=復活大祭]いっぱい入院していた пролежал в больнице весь конец поста и святую」[第2章]と語られているが、ここでいう「聖週 святая неделя」とは「復活大祭 Пасха」一日のことなのである。

信者たちは教会から家に戻ると、斎期後初めての肉を口にし、復活大祭と大斎終了を大量の美味な食物と飲物によって祝う。このような祝日の宴席は、若きチェーホフの数々のユーモア小説中に明瞭に描かれている。

復活大祭後の第一週目は〈**光明週 Светлая неделя**〉と呼ばれている。

光明週に続くのは、〈**聖フォマー[トマス]の月曜日 Фомин понедельник**〉から始まる〈**聖フォマーの週 Фомина неделя**〉である。この週はまた〈**クラースナヤ・ゴールカ Красная горка**[原義は「赤い山」]〉と俗称され、大斎期には禁止されていた待望の結婚式シーズンでもあった。だから聖フォマーの週に行

なわれる結婚式の数はとりわけ多かった。

トルストイ Лев Толстой の喜劇『啓蒙の果実 Плоды просвещения』に登場する小間使いターニャは、村へ帰ることを許してくれるように旦那にお願いする。というのも花婿セミョンとの「縁談がまとまり……クラースナヤ・ゴールカには結婚式を挙げる事になっている дело теперь сдалилось... А на Красную горку и свадьба」からというのである[第4幕13景]。

クゥプリーン А. И. Куприн の短編『坊主 Бонза』では次のようなフレーズに出会う——「……彼女の花婿は海軍士官で、結婚式が予定されていた聖フォマーの週を心待ちにしながらモスクワに逗留していた ...ее жених — морской офицер, гостил в Москве в ожидании Фоминой недели, на которой назначен был день свадьбы」。

またトルストイの物語『悪魔 Дьявол』には次のように書かれている——「エヴゲニーはクラースナヤ・ゴールカに市内で挙式するやいなや、若い妻と一緒に村へと去っていった На Красную горку Евгений обвенчался в городе и тотчас же с молодой женой уехал в деревню」[6章]。

さらにチェーホフ Чехов の短編『我生涯 Моя жизнь』では、ミハイルとマーシャが「聖フォマーの週の後ほどなくして вскоре после Фоминой недели」結婚している[10章]。

月の周期により復活大祭やクラースナヤ・ゴールカの時期がどんなに変動しようとも、この時期は常に春である。『アンナ・カレーニナ』の中で次のように述べられているのも、だから偶然ではない——「……復活大祭の翌日には暖かい風が吹き込み始めた……そしてクラースナヤ・ゴールカの真最中に……本物の春が始まった ...на второй день святой, понесло теплым ветром...и на самую Красную горку... открылась настоящая весна」[2部12章]。

6月24日／7月7日に祝われるのは〈**イワン・クゥパーラ祭 Иван Купала**〉である。教会はこの日に(先駆者 Предтеча)受洗聖イオアン[ヨハネ]Иоанн Креститель を追善しているが、実際にはイワン・クゥパーラ祭[教会暦では聖ヨハネ祭]とは、炎と多種多様な植物を用いて悪霊を撃退するための戦いに捧げ

られたキリスト教以前のスラヴの祝日なのである。イワン・クゥパーラ祭の夜には、焚火を焚き、様々なゲームや踊りが催された。ゴーゴリはこの神秘的な祝日を主題に、絶妙この上ない実録的短編『イワン・クゥパーラ祭前夜[聖ヨハネ祭前夜]Вечер накануне Ивана Купалы』を書き上げている。

〈**聖神降臨祭(三位一体祭)Троица**〉は移動祭日で、復活大祭後50日目に祝われる(復活大祭当日も計算に含まれる)。〈**五旬祭 Пятидесятница**〉という別称はここに由来する。この祝日は復活大祭後7週目の日曜日にあたっているからである。また復活大祭後7週目の木曜日は、〈**第7木曜日**[緑の木曜日]**Семик**〉と呼ばれる。

聖神降臨祭は古来植物界崇拝と結びついており、木々やその他の植物への礼拝が大きな位置を占めていた。白樺の枝で住居を飾りつけるという習慣もここに由来している。このような儀式の一つが『エヴゲニー・オネーギン Евгений Онегин』の第二章(35連)に描かれていて、そこではラーリン家 Лариные のことが次のように語られている――

民衆が欠伸をしながら
祈祷に耳傾ける聖神降臨祭の日、
彼等は薬草の束の上に感涙を
3粒ほど流したのだった。
В день Троицын, когда народ
Зевая, слушает молебен,
Умильно на пучок зари
Они роняли слезки три.

〈**ザリャーあるいはゾリャー**[セリ科レビスチカム属の薬草]**Заря или Зоря**〉(別名〈**リュビストーク Любисток**〉)とは良い香りのする草のことであり、聖神降臨祭の奉神礼の際には、罪から身を清めるためにこの草を涙で濡らす必要があったのである。

民衆の習慣に終生興味を抱き続けたゴーゴリは、その手帳に次のように書き込んでいる ——「聖神降臨祭と第7木曜日 —— 人々は3日間働かず、花輪を編み、歌を歌う。花輪を川へ投げ捨てることで幕を閉じる輪舞の祝日 Троицын день и семик — не работают три дня: заплетают венки, поют песни; хороводный празданик, оканчивающийся бросанием венков в реку」。

第7木曜日には村でも町でもお祭り騒ぎが行なわれた。「ヤリーラ原では第7木曜日の度毎に、街の町人たちがお祭り騒ぎを催した На Ярилином поле по семикам городское мещанство устраивало гулянье」—— ゴーリキーA. M. Горький は『マトヴェイ・コジェミャーキンの生涯 Жизнь Матвея Кожемякина』にそう書いている。モスクワではこのような祭りはマリヤ林 Марьинная Роща で行なわれた。

第7木曜日後すぐの土曜日は、〈**親族記憶の土曜日 Родительская суббота**〉とされ、近縁の一族郎党を追善する日であった。

聖神降臨祭が終わるとすぐに〈**聖使徒ピョートル祭[聖使徒ペテロ祭]前の斎 Петров пост**〉が始まり、聖使徒ピョートルとパーヴェル祭[聖使徒ペテロとパウロ祭]まで続いた(6月29日／7月12日)。この斎の開始日は太陰暦に従って、つまり聖神降臨祭との関連で算定されたのに対し、終了日は常に同じ日と決まっていたために、斎の継続期間は5日から42日までと様々であった[1]。

〈**聖使徒ピョートル**(とパーヴェル)**祭**[聖使徒ペテロ(とパウロ)祭]**Петров день**〉、それに民衆が愛した〈**聖使徒ピョートル**(とパーヴェル)**祭前の斎 Петровки**〉は、夏たけなわの草刈の時期にあたっている。「聖使徒ピョートル祭前の斎。暑い時節。草刈たけなわ Петровки. Время жаркое. В разгаре сенокос」(ネクラーソフ Некрасов)。トゥルゲーネフの『ムムー Муму』のゲラシムは、「聖使徒ピョートル祭にあまりに猛烈に鎌を振るったので、若い白樺林など根ごと遠くへ切り払ってしまうほどであった…… о Петров день

[1] 〈聖使徒ピョートルとパーヴェル祭[聖使徒ペテロとパウロ祭]〉の期間が「5日から42日」とされているが、「8日から42日」までの計算違いではないかと思われる。

так сокрушительно действовал косой, что хоть бы молодой березовый лесок смахивать с корней долой...」[2]。

「アヴェールキーは聖使徒ピョートル祭に肉を口にすると寝込んでしまった Аверкий слег, разговевшись на Петров день」――ブゥニンの短編『雑草 Худая трава』はこう始まっている。他ならぬ聖使徒ピョートル祭をもって、斎期に禁じられていた食物を口にすることが許されたのであった。

コンスタンチン・レーヴィン(『アンナ・カレーニナ Анна Каренина』)は、聖使徒ピョートル祭を待たずに自領地の草刈に取り掛かる。それというのも「風でも揺らぐことのない巨大な灰緑色した草原の海 не движимое ветром огромное серо-зеленое море луга」を目にするからである。草原で出くわした老人フォミッチは彼に次のように言う――「わし等のやり方では、聖使徒ピョートル祭まで待つのじゃが、あなたはいつもそれ以前に刈りなさる。まあ、それはそうとして、お陰さまで草の出来も良いようですな。家畜を放牧してやらなければいけませんな По-нашему, до Петрова дня подождать. А вы раньше всегда косите. Что ж, Бог даст травы добрые. Скотине простор будет」[3部2章]。

この場面に続くのは、ロシア文学でも最も素晴らしいページに数えられる、あの有名な草刈の古典的描写である。

聖使徒ピョートル祭の後にやってくる大きな斎は、〈**至聖生神女就寝祭前の斎 Успенский пост**〉である。この斎は8月1日／14日から15日／28日まで続き、生神女マリアの〈**就寝 Успение**〉(＝逝去 кончина)を記念した祝日をもって終わる。至聖生神女就寝祭前の斎は、民間では〈**収穫祭 спожинки**〉(または〈**生神女昇天祭 госпожинки**〉)と呼ばれていた。それというのも至聖生神女就寝祭は、作物刈入の終了を意味したからである。つまり〈収穫祭

[2] 〈聖使徒ピョートルとパーヴェル祭[聖使徒ペテロとパウロ祭]〉あるいは〈聖使徒ピョートルとパーヴェル祭前の斎[聖使徒ペテロとパウロ祭前の斎]〉が正式呼称だが、通常は〈聖使徒ピョートル祭〉、〈聖使徒ピョートル祭前の斎〉と略称される。

спожинки〉の派生源となった動詞「スポジナーチ спожинать」は「ドジナーチ дожинать 刈り終わる」という意味なのである。「収穫祭 спожинки」という語が「生神女昇天祭 госпожинки」に変わったのは、しばしば生神女マリアの呼び名として使われていた「奥方 госпоженка」という語と語呂合わせした結果である。もし神 Бог が主 Господь、つまり旦那様 Господин ならば、生神女マリア Богоматель はその奥方 Госпожа だというわけである。

ドストエフスキーの『罪と罰 Преступление и наказание』ではラスコーリニコフの母が手紙にこうしたためている —— 娘の花婿であるルージンは「今回の肉食期(聖ピョートル祭と至聖生神女就寝祭前の斎に挟まれた期間のこと —— 原著者)に結婚式を挙げたがっていますが、もしもどうしてもその時期にできないようであれば、生神女昇天祭の直後には挙げたい意向です хочет сыграть свадьбу в нынешний мясоед (то есть время между Петровым и Успенским постом — Ю. Ф.), а если не удастся, по крайности срока, то тотчас после госпожинок」[1部3章]。

ゲルツェン А. И. Герцен は『過去と思索 Былое и думы』で次のような会話を描いている ——

「『これは一体どうしたことなんです、アンナ・ヤキーモヴナ、病気なのかね、何も食べないなんて？ Да ты что это, Анна Якимовна, больна, что ли, ничего не кушаешь?』……〈中略〉……『……ええ、まあ、昔風なもんでしてね、はっはっは、今は収穫祭ですからねえ ...да так-с, по-старинному-с, ха, ха, ха, теперь спажинки』」[1部5章]。

トルストイの中編『家庭の幸福 Семейное счастье』第4章は、次のようなフレーズで始まる ——「至聖生神女就寝祭前の斎だったので、このとき精進しようという私の目論見に家人は誰も驚かなかった Был Успенский пост, и потому никого в доме не удивило мое намерение — говеть в это время」。実は至聖生神女就寝祭前の斎あるいは収穫祭を遵守する人はそう多くはなく、この時期の精進は義務的なものと見なされていなかった。『家庭の幸福』のヒロインが精進を決意したのは、強烈な精神的苦悩に急き立てられた結果に過ぎ

ないのである。

重要な秋の祝日といえば、〈**至聖生神女庇護祭 Покров**〉(10月1日／14日)である。この祝日の歴史は910年にまで遡る。この年、エルサレムのある寺院で奉神礼が行なわれている最中、ユローヂヴィー[1]のアンドレイと彼の弟子エピファーニーは空を舞う生神女マリアを目にしたが、その時マリアは祈祷する二人の頭上に大きく白い布、つまり覆い покров を広げ、世界が不幸と苦難から救済されますようにという祈りを唱えたのであった。キリスト教以前の時代、この祝日はあらゆる作物刈入れ作業の終了と寒気の到来を意味するものだった。

民衆は諺の中に至聖生神女庇護祭の意味を簡潔に表現している ――「至聖生神女庇護祭までは秋、至聖生神女庇護祭が過ぎれば冬 До Покрова — осень, за Покровом зима идет」。出稼ぎ農民は至聖生神女庇護祭までに故郷の村へと帰還するのが常だった。ネクラーソフの物語詩『行商人 Коробейники』ではこの祝日が、作中で展開される事件の時期を特定するのに小さからぬ役割を果たしている。「荷物箱が空になったら／至聖生神女庇護祭には帰郷しよう Опорожнится коробушка / На Покров домой пойду」[1部2連] ――若い行商、つまり小間物を商う巡回商人はそう語る。「けれど、カテリーヌゥシカには辛いこと／至聖生神女庇護祭の日まで若者を待つことは……寒気が近づくのを感じると、カーチャの心は益々燃え上がる……こうしてついに至聖生神女庇護祭の日がやってきた！ Да, трудненько Катеринушке / Парня ждать до Покрова... Чуя близость холодов, Катя пуще разгорается... Вот и праздничек Покров!」[5部1連]。

至聖生神女庇護祭は、ただたんにあらゆる農作業の終わりを告げる陽気な1日であったばかりか、新兵徴募の悲しい1日でもあった。「指令書には、至聖

[1]「ユローヂヴィーюродивый」は、わざと馬鹿を装ったり奇行を繰り返す行者のこと。自らの行為によって引き起こされる世間からの批難や侮辱に耐える一方で、世間の悪を暴露する機能を果たした。一般に「風癲行者」「宗教痴愚」「佯狂者」と訳される。

生神女庇護祭までに新兵を街へ連行すべし、と書かれていたВ приказе сказано, до Покрова нужно свезти рекруг в город」── トルストイの短編『ポリクゥシカ Поликушка』では執事が地主夫人にそう告げている[1章]。

〈主の降誕祭前の斎 Рождественский пост〉 あるいは **〈フィリップの斎 Филиппов пост〉** は聖フィリップ祭 День святого Филиппа[Филиппов день]の翌日、つまり11月15日／28日から始まり、降誕祭前糖飯日[クリスマスイブ] рождественский сочельник の12月24日／1月6日に終わる。つまり40日間続くことになる。この祝日は(大斎に次いで)2番目に重要な斎であった。

古風なラーリン夫妻の性格描写には(『エヴゲニー・オネーギン』)、読者はもちろんこの小説の注釈者たちさえ見逃してしまうような皮肉な内容を含んだ1行がある ──「……彼等は年に2度精進した…… Два раза в год они говели...」(2章35連)。だが **〈精進すること говеть〉** が必要だったのは年に2回ではなく、斎の回数分、すなわち年に4回だったのである！ 精進の回数を2回とすることによってプゥシキンは、ラーリン夫妻が「平和な生活の中で／懐かしい昔の慣習 в жизни мирной / Привычки милой старины」を守りながらも、決して熱心に斎を守る人々ではなかったということを示そうとしているのである(これはプゥシキンの同時代人にとっては言わずもがなのことであった)。したがってラーリン夫妻が精進したのはもっとも重要な斎のとき、つまり大斎と主の降誕祭前の斎のときだけであったと考えるべきなのである。

日常の生活では〈フィリップの斎 Филиппов пост〉は通常 **〈フィリポフカ Филипповка〉** と略称されていた[1]。レスコフの短編『ある農婦の生涯 Житие одной бабы』では、「11月も終わりに近づき、フィリポフカが始まった Ноябрь уж приходил к концу, началась Филипповка」というフレーズに出会う[2章冒頭]。しかし、フィリポフカと呼ばれていたのは〈フィリップの斎〉そのもののみならず、その前日、つまり〈フィリップの斎直前日 Заговенье〉も含まれていた。**〈斎直前日 Заговенье** или **Заговены〉** とは斎が始まる前日

[1] 〈フィリポフキ Филипповки〉と複数形で呼ばれることもある。

のことで、斎には食せない食物を口にすることが許されていた。

経営上手なコロボーチカはチチコフに、「わたしんとこじゃフィリップの斎に備えて鳥の手羽だって出しますよ У меня к Филиппову посту будут и птичьи перья」と言っている[『死せる魂』1部3章]。フリップの斎前日には冬場の保存用に家禽が普段よりも大目に屠殺されたのである。

他の斎と同様、フィリップの斎 Филиппов пост 期間も結婚式を行うことは禁じられていた。シチェドリン M. E. Салтыков-Щедрин の『僻地の旧習 Пошехонская старина』の次のフレーズもここに由来している——「フィリップの斎が近づいてきたので、降誕祭の肉食期に結婚式を行うことが決められたのだった И так как приближались Филипповки, то решено было играть свадьбу в рождественский мясоед」[第29章]。

〈肉食期 Мясоед〉とは、肉食が許されるほか、斎に関連するその他の禁制がすべて解禁される期間のことである。**〈降誕祭の肉食期 Рождественский мясоед〉**とは、主の降誕祭 Рождество Христово から大斎 Великий пост までの期間のことである。ゴーゴリの『結婚 Женитьба』では、筋金入りの独身者ポトコレシン Подколесин が「こうなったら是が非でも結婚しなきゃならん наконец точно нужно жениться」という結論に達しながらも、「そら、またしても肉食期をやり過ごしちまった。まったく準備は万端だと思えるし、仲人だってかれこれ3ヶ月は足を棒にしているというのに、このザマだ Вот опять пропустил мясоед. А ведь, кажется, все готово, и сваха вот уж три месяца ходит」と自分をなじるのである[第1幕第1景]。

〈降誕祭前糖飯日 (рождественный) сочельник〉もしくは**〈粗末な糖飯の日 голодная кутья〉**(12月24日／1月6日)はフィリップの斎最後の斎日である。であればこそ、ゴーゴリ作品に登場する鍛冶屋ワクゥラ Вакула は、揚饅頭 вареник をがっつくパシューク Пасюк を見て、「今日は粗末な糖飯の日だっていうのに、あいつは揚饅頭を食ってやがる。揚饅頭は食っちゃいけない日なのに！ Ведь сегодня голодная кутья, а он есть вареники, вареники скоромные!」(『降誕祭の前夜 Ночь перед Рождеством』[『ディカーニカ近郷夜話』第2部])

と考えてしまうのである。

〈**主の降誕祭 Рождество Христово**〉は、キリスト教のカレンダーにおいては復活大祭 Пасха に次いで重要な祝日であった。これを 9 月 8 日／9 月 21 日に主の降誕祭よりずっと質素に祝われる〈**至聖生神女降誕祭 Рождество Богородицы**〉(キリストの母の誕生日)と混同してはいけない。

主の降誕祭直後から〈**クリスマス週間 святки**〉が始まるが、この祝日の記述を皮切りにして、私たちはこれまで主要な祝日や斎を列挙してきたのであった。

これまで本章では言及されなかったが、ロシア古典文学ではまま見受けられる〈**民衆暦におけるその他の特定の日付と用語 Остальные даты и термины народного календаря**〉については、以下に(使用上の便宜を考慮して)アルファベット順に掲げておくことしよう。

〈**至聖生神女進堂祭 Введение во храм Пресвятой Богородицы**〉(民間ではたんに〈**進堂祭 Введенье**〉と呼ばれる)は、11 月 21 日／12 月 4 日に祝われる。のちの生神女となるマリアが 3 歳のとき、両親は彼女をエルサレムの神殿 иерусалимский храм に奉献した(この〈奉献する ввести〉という動詞から〈進堂祭 введение〉という呼称が生まれた)。マリアはそのまま神殿に預けられ、成人となる 15 歳までそこで養育されたのち、年輩の男やもめである大工ヨセフ Иосиф に嫁いだのであった。生神女進堂祭は紛れなき冬日の訪れを意味する。民間では「進堂祭が水面を分厚い氷で覆った Наложило Введение на воду толстое леденье」と言い慣わされていた。

〈**聖枝祭(＝柳の主日)Вербное воскресенье**〉または〈**主のエルサレム入城祭 Вход Господень в Иерусалим**〉は、復活大祭一週間前の日曜日に祝われる。聖枝祭の前日は〈**聖枝祭の土曜日 вербная суббота**〉と呼ばれ、聖枝祭の日曜日に先行する一週間全体は〈**聖枝祭週 вербная неделя**〉と名づけられている。古代エルサレムではシュロの枝 пальмовые ветви をもってイエス・キリストの入城を歓迎したのだが、ロシアではシュロの枝が柳 верба という古代人に魔法の力が宿ると信じられた植物にとってかわられてしまったのであ

る。福音書の言い伝えによれば、聖枝祭にイエス・キリストは驢馬(軍馬とは異なり、穏やかさとおとなしさ кротость и смирение を象徴する)に乗って粛々とエルサレム入城をはたし、そこで最後の献身的な活動を行い、そのことによって神の子であり人類の救世主であるという世評を確立したのであった[マタイ伝21章1-11節／マルコ伝11章1-11節／ルカ伝19章28-40節／ヨハネ伝12章12-19節]。

〈主の昇天祭 Вознесение Господне〉 は復活大祭後40日目に、すなわち5月1日～6月4日／5月14日～6月17日のいずれかの日に祝われる。この日、イエスは自らの地上生活を終えるにあたってオリーブ山 гора Елеонская へ登り、弟子である使徒たち апостолы を祝福し、昇天したのであった[マルコ伝第16章19-20節／ルカ伝24章50-53節／使徒行伝1章9節]。トルストイの『復活 Воскресение』において、ネフリュードフ Нехлюдов が2度目におばたちのもとを訪れ、そして彼とカチューシャ Катюша との関係に決定的転機が訪れるのが、この主の昇天祭の日であった[第1部17章]。

〈主の十字架挙栄祭 Воздвижение креста Господня〉 は毎年、9月14日／27日に祝われる。これはキリスト処刑の地ゴルゴダ Голгофа に、後年その地で発見されたキリスト受難の十字架が建てられていた воздвигнут ことを記念するものである。民衆はこの十字架挙栄祭を農民的俗信と結びつけていた。「穀物が畑から出ていってしまった Хлеб с поля двинулся」(すなわち、穀物束の最後の山が取り入れられたということ)や「鳥は飛び立ってしまった Птица в отлет двинулась」といった成句がそのことを物語っている。

〈晩課 Вечерня〉 とは教会の夜の勤行のことである。

〈聖神祭 Духов день〉 とは、三位一体 Троица における三つの相 лицо のうちの一つである聖霊 Святой Дух を祝う祭日であり、聖神降臨祭(＝三位一体祭)Троица の翌日に祝われる。

〈春の聖ゲオルギー祭 Егорий Вешний〉。ゲオルギー・ポベドノーセツ Георгий Победоносец(Егорий は Георгий の俗称であり、победносец は「勝利者」の意)は、いつでも特別に敬愛される聖人であった。彼は馬にまたがり、

槍で竜を刺し殺そうとする戦士の姿で描かれる。4月23日／5月6日に祝われるが、この日は農作業の開始日とされる。

〈秋の聖ゲオルギー祭 Егорий Осенний〉または**〈ユーリーの日 Юрьев день〉**(11月26日／12月9日)もまたゲオルギー・ポベドノーセツに捧げられている。民衆の間では春と秋の聖ゲオルギー祭について、「一人は飢えのゲオルギー、もう一人は凍えのゲオルギーОдин Егорий голодный, другой холодный」と言い慣わされていた。1607年まで、秋の聖ゲオルギー祭(ユーリーの日)には農奴がある地主から別の地主へと移動することが許されていた。この権利の撤廃は次のような悲哀に満ちた言い回しを生み出した——「とんでもないことになったぞ Вот тебе, бабушка, и Юрьев день」。

〈早課 Заутреня〉とは早朝の勤行のことである。「……鐘が鳴っている／朝のお勤めじゃ ...звонят / К заутрени」——プゥシキンの『ボリス・ゴドゥノフ Борис Годунов』ではピーメン Пимен がそう言って、グリゴーリーГригорий との会談を打ち切っている[「深夜。チュードフ修道院僧房」]。

〈聖イリヤー祭 Ильин день〉は、農業と水難 водная стихия の庇護者である峻厳な預言者イリヤーпророк Илья に献ぜられた祝日である。スラヴ農民の信仰において、イリヤーは異教の神ペルーン Перун[1] にとってかわったものと思われる。ペルーン神と同様、聖イリヤーもまた戦車 колесница に乗って空を縦横無尽に駆け巡り、地上へ向けて火の矢(稲妻)と雹を投げ落とす。聖イリヤー祭は実際、しばしば雷雨の発生する7月20日／8月2日に祝われる。農民にとって聖イリヤー祭は草刈期の終わりと収穫期の訪れを意味している——「預言者イリヤーは夏を終わらせ、穀物の刈入れを始める Пророк Илья лето кончает, жито зажнает」、「預言者イリヤーは草刈の限界 Илья Пророк — косьбе срок」(草刈の限界とは草刈の終了時という意味である)。

[1] 10世紀の東スラブの異教神。天界、山頂に住むペルーンは、矢を放ち、稲妻で木を引き裂き、石を砕き、最後には肥沃と豊穣をもたらす雨を降らせたと言われている。キリスト教の導入とともに、ペルーンは聖人イリヤーにとってかわられた。

〈**肉断ち日 Мясопуст**〉とは教会が肉食を禁ずる日で、とりわけ謝肉祭直前の日曜日[つまり復活大祭8週間前の日曜日]のことを指す。

〈**春の聖ニコラ祭 Никола Вешний**〉は5月9日／22日に祝われる。正教徒のあいだで最も人気のある聖人ニコラ Никола(ニコライ Николай)に捧げられた祝日である。聖ニコラは水夫と漁師、商業と農業の庇護者である。この祭日に多くの畑や菜園で農作業が始められる。民間では「ニコラが来てくれたら、暖かくなるだろう Пришел бы Никола, а тепло будет」と言って、この祭日のくるのを心待ちにした。トゥルゲーネフの『初恋 Первая любовь』ではこの祭日の日付がもろに示されている――「私たちは町から(別荘へ)5月9日に、つまりちょうど聖ニコラ祭の日に引っ越したのだった Мы переехали из города (на дачу) 9 мая, в самый Николин день」[第1章]。

〈**冬の聖ニコラ祭 Никола Зимний**〉は、12月6日／19日に祝われる聖ニコラの誕生日である。トルストイの短編『主人と下男 Хозяин и работник』は日時の指定から始まっている――「それは70年代の、冬の聖ニコラ祭の翌日のことだった Это было в семидесятых годах, на другой день после зимнего Николы」[第1章]。誰かが聖ニコラ祭の日にひどく酔っ払うと、次のように言われるのだった――「乞食袋ひとつしか残らないほど飲みまくった Проникололился до сумы」。この時期のロシアでは、ニコラの厳寒 никольские морозы と称される大寒波が猛威を振るうこともしばしばである。

〈**聖体礼儀(＝聖体拝領)Обедня**〉(正式には Литургия)とは、朝と昼に行なわれる教会の勤行のことである。プゥシキンの『駅長 Станционный смотритель』では、ドゥーニャ Дуня が日曜の聖体礼儀に出たきり帰ってこない。軽騎兵 гусар が彼女を連れ去ってしまうからである[『ベールキン物語』所収]。

〈**主の変容祭 Преображение**〉は8月6日／19日に祝われる。イエスがタボル山 гора Фавор で祈りを捧げたとき、彼の姿と衣服がこの世のものとは思えないような変容を遂げ、神の声がイエスは神の御子であると告げたのであった[マタイ伝17章1-13節／マルコ伝9章2-8節／ルカ伝9章28-36節]。この言い伝えは、人類を救済するためにこの世に現れた神人としてのキリストの本質を示してい

る。

パステルナーク Б. Л. Пастернак の詩作品『8月 Август』では次のように詠われている――「あなた方は群なして歩いてきた、一人一人あるいは二人一組となって。／と突然誰かが気づいた、今日は／旧暦の8月6日、／主の変容祭なのだと Вы шли толпою, врозь и парами,/ Вдруг кто-то вспоминал, что сегодня / Шестое августа по-старому,/ Преображение Господне」[『ドクトル・ジヴァゴ』第17編「ジヴァゴ詩篇」第14歌]。

農民のカレンダーでは、主の変容祭は秋蒔きの開始日にあたる。

〈復活大祭と聖神降臨祭(＝三位一体祭＝五旬祭)の中日祭 Преполовение〉(「中日 преполовение」の文字通りの意味は「半分 половинка」、「中間 середина」)は、復活大祭 Пасха と聖神降臨祭 Троица の中間にあたる祝日である。トルストイの短編『神父セルギー Отец Сергий』の主人公セルギー神父は、この祝日の前夜、自分の洞窟教会で徹夜祷 Всенощная に従事している[5章]。

〈教区祭日 Приходский праздник〉または**〈寺院祭日 храмовый праздник〉**とは各教会毎の祝日、あるいは教会にその名を冠した聖人を祝う地域的な祝典のことである。

〈第一(蜂蜜)救世主祭 Спас первый(медовый)〉は8月1日／14日に祝われる。救世主キリスト Христос Спаситель(略して Спас)が苦しみを受けた十字架に畏敬を表すために定められた祝日である。農民はこの祝日を蜜蜂の巣箱から蜜房を取り出す日と重ね合わせていた(「蜜蜂の медовый」という形容辞はここに由来する)。種蒔きの開始との結びつきについては、次のような言い慣わしがあった――「第一救世主祭は最初の種蒔時 Первый Спас — первый сев」。

〈第二(林檎)救世主祭 Спас второй(яблочный)〉は主の変容祭 Преображение(上記参照)と同日に、すなわち8月6日／19日に祝われる。これまたイエス・キリスト(救世主 Спас)に捧げられた祝日である。林檎収穫の開始日とされる。第二救世主祭までは、完熟した林檎といえども口にすることは

罪であると考えられていた。この祝日以降、寒さが増していく。ために「第二救世主祭には、万一に備えて手袋を持て На второй Спас бери рукавицы про запас」と言い慣わされた。

〈**第三(画布)救世主祭 Спас третий** (на полотне)〉は8月16日／29日に祝われる。イコン、すなわちキリストを描いた画布を、エデッサ Эдесса(小アジアの町)からコンスタンティノープルへ運び移したことを記念して制定された祝日である。この祝日は農民の生活においては収穫と秋蒔きの終了に結びつけられていたため、「第三救世主祭が穀物を貯蔵してくれた Третий Спас — хлеб припас」と言い慣わされた。

〈**主の迎接祭 Сретение**〉は2月2日／15日に祝われる。モーセの戒律 Моисеев закон にしたがい、誕生後40日目に母マリアは、神に我が子を召し合わそうと、イエスをエルサレムの神殿に連れていった。幼児を出迎えたのは(ここから「迎接祭 Сретение」という呼名が生まれた。つまり「сретение」とは現代風に言えば「出迎え встреча」なのである)、敬虔な教区の長老シメオン старец Симеон と預言者アンナ пророчица Анна であった。シメオンはそのとき、この幼児は「異教の徒を啓蒙する光である свет к просвещению язычников」と万人に聞こえるよう高らかに宣言したのだった[ルカ伝2章22-38節]。主の迎接祭は厳しい寒さの訪れる時期であり、この時期の寒さは迎接祭大寒 сретенские морозы とも呼ばれるほどだが、一方また春への移り変わりが感じられる時期でもある。そのため、「主の迎接祭に陽が照れば素晴らしい夏になるし、迎接祭に冬が居座っていれば大寒がやってくる На Сретенье — солнце на лето, а зима на мороз」、「冬が春を出迎えている Зима весну встречает」、「主の迎接祭にカフタンとシューバが出会った На Сретенье кафтан с шубой встретился」、あるいはまた「主の迎接祭にはジプシーがシューバを売る На Сретенье цыган шубу продает」などと言い慣わされたのだった[1]。

---

[1] 「カフタン кафтан」はダブルの男子用長袖上衣のことであり、「シューバ шуба」は毛皮外套のこと。

〈付録〉

正教年中行事一覧

●日付は旧暦とそれに13日加えた新暦を斜線で仕切って前後に示した。
●移動祝日については@の後にその期日決定方法を示した。
●〈復活大祭〉は移動祝日であり、毎年期日が変わるが、ここでは具体的イメージを掴み易いように2001年の教会暦に従い〈復活大祭〉を4月2日／15日として示した。その他の移動祭日の日付はこれを基準としている。なお移動祭日は日付を[　]で括って区別した。
●下線を引いてあるのは、「12大祭」と呼ばれるとくに重要な祝日である。
●祝日の呼称が複数ある場合は(　)内に示した。

〈復活大祭 Пасха　Христова〉(〈光明キリスト復活祭 Светлое　Христово Воскресенье〉、また民間では**〈聖週 Святая неделя〉**、**〈聖 Святая〉**とも呼ばれた)
@春分を過ぎて初めての満月となった後の最初の日曜日に祝われるので、3月22日～4月25日／4月5日～5月8日までの間を行き来することになる。
[4月2日／15日)]

〈光明週 Светлая неделя〉
@〈復活大斎〉翌日からの一週間。
[4月3日／16日～4月9日／22日)]

〈聖フォマー[=トマス]の月曜日 Фомин понедельник〉
@〈復活大斎〉後2週目の月曜日。
[4月10日／23日)]

〈聖フォマー[=トマス]週 Фомина неделя〉(〈クラースナヤ・ゴールカ Красная горка〉)

@〈復活大斎〉後2週目の一週間。ちなみに〈復活大祭〉後3週目は「携香女(けいこうじょ)週 неделя святых жен-мироносец」、4週目は「癩者(らいしゃ)週 неделя о расслабленном」、5週目は「サマリア人週 неделя о самаряныне」、6週目は「瞽者(こしゃ)週 неделя о слепом」と呼ばれる。

[4月10日／23日～4月16日／29日]

〈春の聖ゲオルギー祭 Егорий Вешний〉

4月23日／5月6日

〈復活大祭と五旬祭の中日祭 Преполовение〉

@〈復活大斎〉と〈五旬祭〉の中間にあたる日曜日。

[4月26日／5月9日]

〈春の聖ニコラ祭 Никола Вешний〉

5月9日／22日

〈主の昇天祭 Вознесение Господне〉

@〈復活大祭〉から40日目、すなわち〈復活大斎〉後6週目の木曜日。

[5月11日／24日)]

〈第7(緑の)木曜日 Семик〉

@〈復活大斎〉後7週目の木曜日。

[5月18日／31日]

〈親族記憶の土曜日 Родительская суббота〉

@〈第7木曜日〉直後の土曜日。

[5月20日／6月2日]

〈聖神降臨祭／三位一体祭 Троица〉(〈五旬祭 Пятидесятница〉)

@〈復活大祭〉から 50 日目、すなわち〈復活大祭〉後 7 週目の日曜日。

[5 月 21 日／6 月 3 日]

〈聖神祭 Духов день/Дено святого духа〉

@〈聖神降臨祭〉の翌日(月曜日)。

[5 月 22 日／6 月 4 日]

〈聖使徒ピョートル[=ペテロ](とパーヴェル[=パウロ])祭前斎 Петров пост / Петровки〉

@〈聖神降臨祭〉8 日後、つまり〈聖神祭〉1 週間後の月曜日より〈聖使徒ピョートル[=ペテロ](とパーヴェル[パウロ])祭〉前日までだが、〈聖神降臨祭〉が〈復活大祭〉を基準とした移動祝日であるため、その年の〈復活大祭〉によって期間にばらつきがあった。つまり〈復活大祭〉が一番早い 3 月 22 日／4 月 5 日の場合は斎期間は 42 日間となり、一番遅い 4 月 25 日／5 月 8 日の場合は 8 日間となるわけである。

[5 月 22 日]～6 月 29 日／[6 月 4 日]～7 月 12 日

〈イワン・クゥパーラ祭 Иван Купала〉(教会暦では〈聖イオアン[ヨハネ]祭 Иванов день〉)

6 月 24 日／7 月 7 日

〈聖使徒ピョートル[=ペテロ](とパーヴェル[=パウロ])祭 Петров день〉

6 月 29 日／7 月 12 日

〈聖イリヤー祭 Ильин день〉

7 月 20 日／8 月 2 日

〈第一の(蜂蜜の)救世主祭 Спас первый (медовый)〉

8 月 1 日／14 日

〈至聖生神女[=聖母]就寝祭前の斎 Успенский пост〉(民間では〈収穫祭 Спожинки〉、〈生神女[=聖母]昇天祭 Госпожинки〉とも呼ばれた)

@〈生神女[=聖母]就寝祭〉前2週間の斎だが、精進は義務なものではなかった。

8月1日～15日／8月14日～28日

〈主の変容祭(主の顕栄祭)Преображение〉

8月6日／19日

〈第二の(林檎の)救世主祭 Спас второй (яблочный)〉

8月6日／19日

〈至聖生神女[=聖母]就寝祭 Успение〉

8月15日／28日

〈第三の(画布上の)救世主祭 Спас третий (на полотне)〉

8月16日／29日

〈至聖生神女[=聖母]降誕祭 Рождество Богородицы〉

9月8日／21日

〈主の十字架挙栄祭 Воздвижение креста Господня〉

9月14日／27日

〈至聖生神女[=聖母]庇護祭 Покров〉

10月1日／10月14日

〈秋のカザン至聖生神女[=聖母]イコン祭 Осенний праздник иконы Казанской Богоматери〉

10月22日／11月4日

〈聖フィリップ祭 Филиппов день〉

11 月 14 日／27 日

〈主の降誕祭前の斎 Рождественский пост〉(〈フィリップの斎 Филиппов пост〉、〈フィリポフカ Филипповка〉)

@〈聖フィリップ祭〉翌日から〈主の降誕祭〉前日までの 40 日間の斎。大斎に次いで重要な斎。

11 月 15 日～12 月 24 日／11 月 28 日～1 月 6 日

〈至聖生神女[=聖母]進堂祭 Введение Богородицы во храм〉(民間ではたんに**〈進堂祭 Введенье〉**)

11 月 21 日／12 月 4 日

〈聖エカテリーナの日 День святой Екатерины〉

11 月 24 日／12 月 7 日

〈秋の聖ゲオルギー祭 Егорий Осенний〉(〈ユーリーの日 Юрьев день〉)

11 月 26 日／12 月 9 日

〈冬の聖ニコラ祭 Никола Зимний〉

12 月 6 日／19 日

〈主の降誕祭前の糖飯日 Рождественный Сочельник〉(〈粗末な糖飯の日 Голодная кутья〉)

@〈主の降誕祭〉前日、〈主の降誕祭前の斎〉あるいは〈フィリップの斎〉の最終日。また〈主の洗礼祭〉前日は〈主の洗礼祭前の糖飯日 Крещенский сочельник〉と呼ぶ。

12 月 24 日／1 月 6 日

〈主の降誕祭 Рождество Христово〉

12 月 25 日／1 月 7 日

〈降誕祭の肉食期 Рождественский мясоед〉

@〈主の降誕祭〉から〈大斎〉(〈復活大祭〉の7週前から始まる)前日までの期間。

12月25～[2月12日]／**1月7日**～[2月25日]

〈クリスマス週間 Святки〉

@〈主の降誕祭〉翌日から〈主の洗礼祭〉までの12日間。

12月26～1月6日／1月8日～19日

〈主の洗礼祭前の糖飯 Крещенский сочельник〉

1月5日／18日

〈主の洗礼祭 Крещение〉(〈神現祭 Богоявление〉)

1月6日／19日

〈タチヤーナの日 Татьянин день〉

1月12日／25日

〈斉一週 Сплошная неделя〉

@〈謝肉祭〉2週前、すなわち〈斑週〉1週前、すなわち〈復活大祭〉10週前の1週間。

[1月23日～29日／2月5日～11日]

〈斑週 Пестрая неделя〉

@〈謝肉祭〉1週前、すなわち〈復活大祭〉9週前の1週間。

[1月30日～2月5日／2月12日～18日]

〈主の迎接祭 Сретение〉

2月2日／15日

〈肉断ち日 Мясопуст〉

@一般に肉食が禁じられる日のことだが、とくに〈謝肉祭〉直前の日曜日、すなわち〈復活大祭〉8週前の日曜日。

[2月5日／18日]

〈謝肉(バター)祭 Масленица〉(〈肉断ち週 Мясопустная неделя〉)

@〈復活大祭〉の8週前の月曜日から始まる一週間。

[2月6日～12日／2月19日～25日)]

〈謝肉大祭 Широкая масленица〉

@〈謝肉祭〉後半の4日間(木曜日～日曜日)。

[2月9日～12日／22日～25日]

〈赦罪の主日(日曜日)Прощеное воскресенье〉(〈赦罪の日 Прощеный день〉、〈乾酪の日 Сыропустная неделя〉)

@〈謝肉祭〉週最終日の日曜日。〈大斎〉の前日。

[2月12日／25日]

〈聖月曜日 Чистый понедельник〉

@〈復活大祭〉7週前の〈大斎〉が始まる月曜日。

[2月13日／26日]

〈大斎 Великий пост〉

@〈謝肉祭〉最終日、すなわち〈赦罪の主日〉の翌日から〈復活大祭〉までの7週間。ただし〈大斎〉期間は最終週の〈受難週間〉を除けば40日間となる。

[2月13日～4月1日／2月26日～4月14日]

〈至聖生神女[＝聖母]福音祭 Благовещениа〉

3月25日／4月7日

〈聖枝祭週 Вербная неделя〉

@〈聖枝祭〉に先行する一週間、即ち〈復活大祭〉2週前の1週間。

[3月20日～26日／4月2日～8日]

〈聖枝祭の土曜日 Вербная суббота〉

@〈聖枝祭〉前日の土曜日。

[3月25日／4月7日]

〈聖枝祭[＝柳の主日、聖枝祭の日曜日]Вербное воскресенье〉(〈主のエルサレム入城祭 Вход Господень в Иерусалим〉)

@〈大斎〉6週目の日曜日、すなわち〈復活大祭〉前の最終日曜日。

[3月26日／4月8日]

〈受難週間 Страстная неделя/седмица〉

@〈聖枝祭〉から〈復活大祭〉前の土曜日までの1週間。〈大斎〉最終週。この週は月曜から土曜まですべての曜日に「受難の страсной」あるいは「大 великий」という形容辞がつく。たとえば Страсной (Великий) понедельник, Страсная (Великая) среда というように。

[3月26日～4月1日／4月8日～14日]